

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	35 / 2014 / 26 - 27 (再編集版)
タイトル	ナラメリンゴフシ(虫えい)の観察
著 者 名	五十嵐正俊

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

5回校舎の変わった3代目

第3代 五十嵐 正俊

昭和20年4月5日、我々世代の青中第49回生は合浦に建っていた白亜の学び舎に入学したのであった。しかし、私自身はその翌日、奥羽本線の1番列車で青森を後にしていた。したがって、同年7月28日の空襲によって焼失した白亜の学び舎での授業体験は無い。

白亜の学び舎の記憶と言えば入学試験でのマツト上での「前転」の直後に紙に書かれた漢字を読まされたくらいで、ほとんどは内申書によって可否が決められていた様である。

転学先の養成所(特攻隊員養成所?とは知らずに)では1日50分間の7時間授業(3年間で中学の課程を修了するため)と夕食後、就寝時間までの3時間の自習時間が課せられていた。そして運命の8月15日、炎天下の営庭(校庭)で「……耐えがたきを耐え、偲び難を偲び……」の昭和天皇の玉音放送を聞かされたのであった。

その後は休戦ということで、一時、命令があるまで自宅待機と云うことになったのであった(青森に着いたのは8月23日、朝8時過ぎ、N駅から満員列車に窓から入れて貰って津軽新城駅で下車(手配して貰った乗車券は津軽新城駅まで))。歩いて焼け野原の青森に辿り着いたのであった。だが、自宅は小さな焼けトタンのバラックになっていた。

養成所からの文書が配達されたのは秋も深まった頃(10月?)で、戦災後の仮校舎(松森校舎)に復学の手続きに行ったのであった。たまたま入学式当時の担任だった狩野尾義衛先生が覚えていてくれたので、すんなり復学を許可して貰ったのであった(養成所の同期生の中には「養成所」は各種学校とは違う(学校の字が無い)ので復学「転校」を認めて貰えず、やむを得ず鉄道教習所(希望すれば無条件入所可能)に移って国鉄機関士になった者が多い)。

松森校舎は海軍関係の要員の寮を改装(畳を外し、部屋の壁を取り外して拡張しただけの粗末な板の間)したザラザラの板に胡坐で坐り、野外写生用の図版を肩に掛けた状態で授業を受けたのであった。その頃は教科書を持っている生徒は少なく(7月28日の空襲で自宅を焼かれ、着のみ着たままで逃げ延びたので教科書類は焼失した。私も命令があつて、日記類などの他、教科書までも焼却処分していたので、教科書無しの態で授業を受けたのであった。

その頃の野外実習(?)で勝田の田圃で大竹先生(生物担当)からその年の冷害状態(大凶作)の説明があつたのを記憶している。結局戦後の大食量難時代が始まったのであった。

その後、教科書に墨を塗る様に「GHQ」からの命令があつたのだろう。教科書を持っている生徒は指定されたページに墨塗りの作業があつた。

校舎は翌年、一時当時の中(現北高)に間借り生活(この頃の思い出としては、講堂で「太宰治氏の講演を聞いたことである……講演の内容は殆ど記憶に無いが、壇上で講演する太宰氏は黒メガネを掛けてかなり大きい声だった」)を経験している。

その後、筒井の五連隊跡に駐留していた米軍(ワイルドキャッツ部隊)が撤退する際に、その部隊の司令官に当時の横山武夫校長に会った際に、撤収後は校舎難の青森中学を入れるように上部に進言するので、その様に地元でも話しを進める様に助言されたと言う。

そして、駐留米軍が去った後の五連隊跡地に入れて貰ったのであった(これは最近、元校長の「杉

山芬氏」から聞かされた)。

昭和22年(1947年)4月には学制改革により、義務教育の新制中学1年生が入学し、生物部員となった者もいた。我々世代も新制中学生とされた。でも、まだ机も無く、胡坐の授業生活は続いていた。

教室と言っても兵舎の内務班(兵隊の宿舎は10人程度の小部屋に仕切られ、班長や古兵が同居し、新兵教育が行われた様である)の壁を取り壊し、拡張された部屋には太い柱(30cm程度)があり、先生からの死角が出来ていた。

この頃、天内君(3代)からの誘いがあり、生物部に入ったのだと思う。当時は鈴木二好君、葛西重憲君、江口祥一君、久保卓嗣君などが一緒に、先輩には蝦名憲さん、坂本瀧夫さん、松尾敏明さん、長谷川寿二さんなどがおり、1年先輩には長内健治さん、鳴海正泰さん、上田治さん、元尾健さん、西村幹夫などがおられ、先生方には河本達雄先生、大竹正治先生、下山義明先生などが居られた。河本先生が退職されてから、三上喜四郎先生、昭和25年大竹正治先生が転勤されてから広島高師出身で、新任の田村博美先生が赴任されて来た。そして新しく部員になったのは4代目に澤住庸宏君、小笠原達君、斉藤義男君、嶋中博君、塩谷又衛君、進藤力夫君、成田広光君などが加わった。

この年は田村先生が生物部員を連れて酸ヶ湯から十和田湖までキャンプしながらの採集旅行が行われたのであった。

机が整ったのは昭和24~5年頃で、その間の文化祭(2回目?)の後、五連隊校舎から出火し、一部を焼失している。

そしてようやく校舎再建の機運があり、我々3代目は新築された7棟校舎(一部完成)に5回目の引っ越しをしたのであった。昭和25年頃だと思う。そしてこの25年4月から男女共学の方針が決まり、校舎は別々のままながら、青高女と青森高は統合されることになったのであった。そしてクラブ活動だけが一足早く統合されることになったのであった。

「やぶなべ会員名簿」(H7.3月版)を見ると3代目女子部員は石場(淀川)陽子さん、木村(鳴海)恵美子さん、4代目では田邊(久慈)良子さん、木村(松村)英子さん、幸林(山内)功子さん、大越(南)和子さん、渡辺(古津)恭子さんなどの名前が見られる。

他の文化部も活動は一緒に行われることになって、放課後、三四郎池からの農道を通って浪打校舎と筒井校舎を行き来しながらの交流が始まったのであった。

結局、我々昭和7~8年生まれの3代目は合浦の白堊の学び舎→松森のザラ板校舎→市立1中への間借り→五連隊跡の板の間→7棟モルタル塗り校舎と渡り歩きながら、昭和26年3月卒業を迎えたのであった。

同世代の青高女に入学した女生徒の皆さんも戦火のほか勤労働員、農作業など、そして2回の火災に見舞われ苦難の女学校、高校生活を送られたことと思う。

(2014.03.01)